



たまご

〈大阪府〉

黒岩 絵美 44歳
くろいわ えみ

看護師になって初めての年、私はある患者を受け持った。患者はいかにも頑固親父風の人で、病名は胆管がん。看護師に大声で怒鳴ることもよくある。しかし、がんの進行が進み、胆汁を排泄するための管や点滴のチューブなどが体に数本入っており、心なしか表情が沈んでいた。痛みや倦怠感が強いため、患者の負担を考え、日ごろのケアは手際良くするよう先輩看護師より厳しく指導を受けていた。

ある日、チューブの入れ替えのため、全身の清拭を行うことになった。前日、念入りに検査データの情報収集を行い、疾患について調べ、看護技術の本を読みあさり、患者のケアに対する予習を行った。今思えば、それは焦りや不安を解消するために、とにかく勉強して

臨めば大丈夫という気持ちで落ち着けるための儀式で、手順や段取りなど頭に入っていなかったのだと思う。気が付けば朝方になっており、出勤時間が近くなっていたため慌てて家を出た。いよいよ、準備をして頑固親父の所へ出陣し、あいさつをした。おそらく緊張で私の顔はこわばっていただろう。「よろしく」と一言。

熱いタオルを準備し、体を拭きながら湯気越しに患者の顔を見ると、私は急に血の気が引いたような感じになり、不覚にもその場で倒れてしまった。気が付くとソファにもたれ掛かっていた。「大丈夫か、ねえちゃん。部屋に来た時から顔色悪かったし、ちゃんにご飯食べとるんか？ 食べな体力つかんよ。わしは『もって1年生きられへん』

と言われてるけどな、これ食べるたびに寿命が延びると思って毎日食べてるもんがある。これ食べて元気になってや」と、冷蔵庫から木箱に入った烏骨鶏のたまごを出してきて手に握らせてくれた。涙が出ないようにこらえ、家で泣きながらご飯にかけて食べた。たまごを見るたびに思い出す。相手を思いやる気持ち、自分の大切な命の片りんをも分けるような優しさは、私の看護の原点だ。

